Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-02

価値・規範を中心とした社会システム理論の再生のための比較文明学的研究　ーパーソンズ社会学とトッド人類学の接続を基調としてー

小川，晃生

(Degree)
博士（文学）
(Date of Degree)
2018-03-25
(Date of Publication)
2019-03-01
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第7061号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007061

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

論　文　内　容　の　要　旨

論 文 題 目　　（外国語の場合は、その和訳を併記すること。）

価値・規範を中心とした社会システム理論の再生のための
比較文明学的研究
—パーソンズ社会学とトッド人類学の接続を基調として—

氏　　名　：　小川　晃生

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程社会動態専攻

指導教員氏名　（主）　菱　川　英　一　教授
（副）　奥　村　沙矢香　准教授
（副）　松　本　曜　　教授

（注）４，０００字程度（日本語による）。必ずページを付けること。

本博士論文のタイトルは、「価値・規範を中心とした社会システム理論の再生のための比較文明学的研究—パーソンズ社会学とトッド人類学の接続を基調として—」だ。本稿はまず、近年の社会学理論は社会学という学問の中でなぜ不人気なのか、という問いかけから始まる。その一例が、「システム理論は、生物システムの領域から社会システムの領域に転用されると、その経験的—分析的な有用性を失ってしまう」（Habermas& Luhmann, 1971＝一九八七：二一〇）というハーバーマスの言説だ。そこで本稿では近年社会システム理論が求心力を失ってきた理由を理解するために、ルーマン、ギデンズ、今田高俊らの「社会システム学」などを簡単に検討し、それらにシステムのシステムとしての作動を「リアル」に描写することに心血を注いできたという共通項があると指摘した。ところで本稿の主要テーマの一つであるエマニュエル・トッドは主要著書の一つである『移民の運命』のなかで、移民受け入れ国において移民の人類学的システム（家族システムなど）が破壊され、受け入れ国の移民に対する態度（同化志向か隔離志向か）とは独立して、移民が受け入れ国の人類学的システムに同化してゆくと主張した（Todd, 1994＝一九九九）。他方で徳安彰（二〇〇四）は政治システム以外の社会のサブ・システムのグローバルな拡大を前提としたルーマンの社会システム観を「世界社会」（徳安、二〇〇四：一八一）と表現している。両者を比較するとき、昨今の社会システム理論は人間社会というものはそれが存在してきた土地・空間と本来は不可分である、という前提を軽視しているように見える。現代社会システム理論はシステムのシステムとしての作動を「リアル」に描写することに特化してきたのもかかわらず、前述した「リアリティ」と重複しつつ同じでないいわば人類学的「リアリティ」を軽視してきたのではないか。これが、本稿が提起する社会システム理論が求心力を失ってきた理由だ。したがって社会システム理論が再生するためには、家族社会学、文化人類学、歴史人口学のような、人類学的システムの作動を重視してきた諸研究領域と対話しそれらを再受容する必要があるように思われる。

このような問題提起を踏まえて、本稿ではパーソンズ社会学とトッド人類学との「接続」という研究テーマ—以下、パーソンズ＝トッド接続などと表記—を提起する。トッド人類学はいうまでもなく前述した人類学的「リアリティ」を含んでおり、それに加えてイデオロギー分析や近代化プロセスについての説明に関して「革新性」を有している。前者の例は社会民主主義とナチズムとのシステムとしての類似性と倫理上の大きな差異との区別であり、後者の例は日本の近代化プロセスについての説明だ。他方でパーソンズ社会学を選択したのは以下の理由に基づく。パーソンズ社会学は社会システム理論としてより精緻なはずのルーマン社会学などと比べて人類学的「リアリティ」との相性が良い。このことはパーソンズが社会システム、文化システム、パーソナリティ、行動有機体の相互浸透関係を重視した「行為の総合理論」（Parsons, 1951＝一九六〇）を志向していたことからも伺える。またパーソンズ社会学は『宗教生活の原初形態』などで知られるデュルケームやウェーバー社会学と比べてシステム理論としてより洗練されている。本研究の観

点からすれば、パーソンズ社会学は絶妙な位置にある。本稿ではこのようにして、人類学的「リアリティ」を再受容して社会システム理論を再生させるためのパーソンズ＝トッド接続が検討される。ところでこの「接続」は本稿で以下のように定義される。第一に、本接続は価値・規範システムを中心としたものとなる。前述したトッド人類学の「革新性」の根底にあるのは「人類学的基底」という価値・規範システムの記述に関わる概念だ。したがってトッド人類学の「革新性」を取り込むためには、価値・規範システムを中心とした接続をまず検討すべきだ。なおこの点も、溝部明男（二〇一一：三六―三七）がギデンズの「構造化理論」の意義をパーソンズと比較した価値・規範の相対化だと見做していることを踏まえれば、本研究がギデンズではなくパーソンズを研究対象として採用する理由の一つだ。第二に、本接続の研究領域を「比較文明学」だとする。本研究は社会システム理論に人類学的「リアリティ」を再受容するために、ルーマンがあえて「ラディカルに反領域主義的」（Luhmann, 1997＝二〇〇九：二二）な立場を採用したのとは逆に「ラディカルに領域主義的」な立場をとる。ここで重要な役割を果たすのが「共時的比較」―本稿でのこの言葉の使用は高野秀之（二〇〇九）等を踏まえる―だ。そこで本稿では伊東俊太郎編（一九九七）などを参照しつつ共時的比較を重視した分野横断的社会研究というような意味で「比較文明学」を定義し、本研究をこのような意味での比較文明学的研究だとする。以上から本稿では価値・規範システムを中心とした比較文明学的研究として、社会システム理論の再生のためにパーソンズ＝トッド接続が議論される。そして本稿の具体的な研究目的は価値・規範システムの記述のために使用されるトッドの人類学的基底とパーソンズのパターン変数を接続することだ。この接続は、人類学的基底を社会システム理論の研究対象として取り扱うことに貢献する。これは社会システム理論に人類学的「リアリティ」を再受容させるということに他ならない。また本研究においてパーソンズ社会学が果たした役割を振り返ることで、パーソンズ社会学に現代社会学ならびにその近接領域のなかで独自の位置づけを提供することが可能だ。

本稿第一章では、本稿で定義する「比較文明学」という共通項をパーソンズ社会学とトッド人類学が共有していることを確認する。この議論は主にパーソンズ社会学を「均衡理論」とみなす言説を相対化するためのものだ。ここでの分析は基本的に、松岡雅裕（一九九八）や François Chazel（1974＝一九七七）といった先行研究を踏まえたものだ。ただし『社会的行為の構造』にまで遡ってパーソンズにおける比較文明学的変動論を検討した点では独創性を有する。本稿第二章では「戯画的構造主義」―比較のための道具として単純化された「構造主義」―に基づいてパーソンズとトッドの類似点・相違点が検討される。ここではまず、トッド自身が構造主義人類学との決別を強調しているにもかかわらず、トッド人類学に構造主義的側面が散見されることが確認される。他方でパーソンズ社会学にも、構造主義的側面と「構造主義以後」―油井清光（二〇〇四）の使用する語に由来―的な側面の両方が見出される。それらの諸要素のなかでも本稿第

二章では、構造主義的相互連関を伴った「進化」概念が初期パーソンズ（*Working Papers* 以前）において相対的に弱いこと、パーソンズとトッドの両者に（発展）段階論を好んで使用する傾向があること、などに注目する。本稿第三章では「サイバネティクス」概念に基づいてパーソンズとトッドの類似点・相違点が検討される。この章で「サイバネティクス」は先行研究を踏まえて「所与の目的のためのフィードバックによる制御理論」と定義される。そしてこの章での分析において「サイバネティクス」は「所与の目的」、「制御」、「フィードバック」の三要素に分析的に区分される。これはシステム理論にその基盤を持たないトッド人類学を検討するためだ。この章ではパーソンズとトッドを検討することを通して、次章で行うパターン変数と人類学的基底との「接続」のための「土台」が提供される。その「土台」とは、トッドにおける「前近代社会」の「規範」についての記述としての人類学的基底が「近現代社会」における「価値」として「変換」されたものをパターン変数で表現しなおす、という接続の「形式」だ。

本稿第四章で本研究の主要テーマであるパターン変数と人類学的基底との接続が議論される。ここでは本稿第二章の検討を踏まえて *Working Papers* 以前の初期パターン変数が使用され、それに合わせてル＝プレイによる二項対立図式の組み合わせに近い初期人類学的基底が利用される。この接続の「形式」は前述した通りだ。ここで重要な役割を果たすのがパターン変数の「二重性」―宮本孝二（一九九八 b）の指摘するギデンズの「構造の二重性」と無関係―だ。これはトッドが価値・規範について人類学的基底そのものと近代化プロセスとを明白に区別したことを踏まえれば、パターン変数を両者の「混合物」だとみなせるということだ。本稿では前者としてのパターン変数をその「TroP（P）的使用」と表記し後者としてのそれをその「EnfM（P）的使用」と表記する。これらの前提に基づいた接続の例を以下に提示する。なお以下での「基底 fs」は『家族システムの起源』における表記 famille souche（直系家族）に由来する。

表現対象	前近代社会における作動	近現代社会における作動の一次的表現	参照
基底 fs	権威―不平等主義	帰属性―無限定性 普遍主義を TroP（P）的なものとみなすかどうか保留 普遍主義を TroP（P）的なものとみなせば、集合体志向	接続①’ 接続② 接続②’

この接続は価値・規範概念を中心とした本稿で定義する意味で比較文明学的なものだ。繰り返すがこの接続は、人類学的基底を社会システム理論の研究対象として取り扱うことに貢献する。これは社会システム理論に人類学的「リアリティ」を再受容させるということに他ならない。また本研究でパーソンズ社会学が果たした役割を振り返ることで、

「近代を生き尽くそうとした人間」（油井、二〇〇二：五）という油井清光（二〇〇二）のパーソンズ評価と重複するが、「社会学」としてではなく二〇世紀社会の記述に特化した人類学的研究としてパーソンズを再評価することができる。

［ 課程博士用 ］
（ 別紙１ ）

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　　名	小川　晃生
論 文 題 目	価値・規範を中心とした社会システム理論の再生のための比較文明学的研究 ―パーソンズ社会学とトッド人類学の接続を基調として―

要　　旨

本論文「価値・規範を中心とした社会システム理論の再生のための比較文明学的研究―パーソンズ社会学とトッド人類学の接続を基調として―」は、タルコット・パーソンズの社会学とエマニュエル・トッドの人類学との「接続」を通じて、社会学理論、とりわけ社会システム理論の再構築を目指すものである。

論文提出者によれば、近年の社会学理論、なかでも社会システム理論は社会学という学問の中で不人気である。その理由は、昨今の社会システム理論が、人間社会というものはそれが存在してきた土地・空間と本来は不可分であるという前提を軽視しており、システムのシステムとしての作動を「リアル」に描写することには特化してきたかもしれないが、いわば人類学的「リアリティ」を軽視してきたためであると考えられる。したがって、社会システム理論の再生のためには、家族社会学、文化人類学、歴史人口学のような、人類学的システムの作動を重視してきた諸研究領域と対話し、それらを再受容する必要がある。この目的のために、論文提出者は、社会システム理論と人類学的研究の双方から分野横断的な研究者を一人ずつ選んで両者の理論的な接続を試みる、という戦略をとることを試み、具体的にはパーソンズ社会学とトッド人類学との「接続」を提起する。それは、一方でトッド人類学は当然のことながら人類学的「リアリティ」を含んでおり、それに加えてイデオロギー分析や近代化プロセスについての説明に関して「革新性」を有しているからであり、他方でパーソンズ社会学は社会システム、文化システム、パーソナリティ、行動有機体の相互浸透関係を重視した「行為の総合理論」を志向していて、社会システム理論としてより精緻なはずのルーマン社会学などと較べて人類学的「リアリティ」との相性がよいからである。加えてパーソンズ社会学はデュルケーム社会学やヴェーバー社会学などと較べてシステム理論としてより洗練されており、この観点からもパーソンズ社会学は絶妙な位置にあると考えられる。

ところでこの「接続」は以下のように定義される。第一に、本接続は価値・規範システムを中心としたものになる。トッド人類学の「革新性」の根底にあるのは「人類学的基底」という価値・規範システムの記述に関わる概念であり、したがってトッド人類学の「革新性」を取り込むためには、価値・規範システムを中心とした接続がまず検討される。第二に、本接続の研究領域は「比較文明学」であるとされる。本研究は社会システム理論に人類学的「リアリティ」を再受容するために、ルーマンがあえて「ラディカルに反領域主義的」な立場を採用したのとは逆に「ラディカルに領域主義的」な立場をとる。ここで重要な役割を果たすのが「共時的比較」であり、共時的比較を重視した分野横断的社会研究という意味で「比較文明学」を定義し、本研究をこうした意味での比較文明学的研究であるとする。こうして、本論文では価値・規範システムを中心とした比較文明学的研究として、社会システム理論の再生のためにパーソンズ＝トッド接続が議論されることとなる。そしてより具体的には、価値・規範システムの記述のために使用されるドットの人類学的基底とパーソンズのパターン変数とを接続させることが研究の目的として設定される。また本研究においてパーソンズ社会学が果たした役割を振り返ることで、パーソンズ社会学に現代社会学ならびにその近接領域のなかで独自の位置づけを提供することも可能となる。

第一章では、「比較文明学」という共通項をパーソンズ社会学とトッド人類学が共有していることが確認される。『社会体系論』、『行為の総合理論をめざして』といったパーソンズの著書における変動論、文化システムの変動論の存在を確認し、それらの議論を踏まえて『社会的行為の構造』の比較文明学的な読み直しが試みられる。こうした議論を通じて、後期だけでなく初期パーソンズを比較文明学的に捉えることが可能となり、初期パーソンズとトッド人類学とが「比較文明学」という土台を共有していることが示される。

第二章では、「構造主義」概念に依拠してパーソンズとトッドの類似点・相違点が整理される。トッド自身が構造主義人類学との決別を強調しているにも関わらず、トッド人類学には構造主義的側面が散見される。その例は、人類学的基底概念が「無意識」の「深層構造」であること、発展段階論を積極的に多用しているように見えること、家族システムを異なる法則の下に置きつつもその他のシステムに「進化」概念を頻繁に適用すること、などに見出される。他方でパーソンズ社会学は二項対立図式の使用、構造主義的相互連関を伴った「進化」概念の多用、発展段階論の多用といった点で「構造主義的」であるが、文化システムの「伝搬」についての議論の存在、西欧・非西欧の二項対立図式の部分的相対化、「深層」概念の安易な適用を困難にする「相互浸透」概念の存在、といった「構造主義以後」的要素も見出される。そして以上から、トッド人類学とパーソンズ社会学との双方が「構造主義」的側面と「構造主義以後」的側面の両方を併せ持っていることが明らかとなり、そしてパーソンズ＝トッド接続を考えるとき、両者がともに好んで用いる（発展）段階論を縮減的に使用することが重要であるという指摘がなされる。

第三章では、「サイバネティクス」をキー概念としてパーソンズ社会学とトッド人類学との類似点・相違点が検討される。この章で「サイバネティクス」は先行研究を踏まえて「所与の目的のためのフィードバックによる制御理論」と定義され、「所与の目的」、「制御」、「フィードバック」の三要素に分析的に区分される。この章ではパーソンズとトッドを検討することを通して、近代化プロセスについての両者の接続が試みられる。

第四章では、本研究の主要テーマであるパターン変数と人類学的基底との接続が議論される。ここでは第二章での検討を踏まえて、*Working Papers* 以前の初期パターン変数が使用され、それに合わせてル＝プレイによる二項対立図式の組み合わせに近い初期人類学的基底が利用される。またパーソンズとトッドに（発展）段階論への選好が見られることや、第三章での近代化プロセスについての接続を踏まえて、この接続は「前近代社会における規範の記述としての人類学的基底」と「近現代社会における価値・規範の記述としてのパターン変数」との対応関係の整理という形式をとる。この対応関係を整理することで、人類学的基底についての研究を、近現代社会という環境の中で作動するパターン変数についての研究に翻訳することが可能となる。ここで重要な役割を果たすのがパターン変数の「二重性」であり、これはトッドが価値・規範について人類学的基底そのものと近代化プロセスとを明白に区別したことを踏まえれば、パターン変数を両者の混合物と見なせるということである。

本論文は、社会学理論にいかに「リアリティ」を再び与え得るかという根本的な問題意識のもと、パーソンズ社会学とトッド人類学とを「接続」させることを通じてその方途を明らかにしようとする、大きなパースペクティブを有している。また、トッド社会学との接続という新たな視点からパーソンズ社会学を検討することによって、パーソンズ社会学の、ともすれば従来看過されてきた側面にあらためて光を当てることにもつながっている。社会学、とりわけ理論社会学の根本的なあり方を問い直すための土台として本研究を位置づけた上で今後なされるであろう研究の発展も、大いに期待されるところである。

以上の審査結果をもって、本審査委員会は論文提出者・小川晃生が博士（文学）の学位を授与されるに足る資格を有するものと判断した。

審査委員

区　分	職　名	氏　　名	区　分	職　名	氏　　名
主　査	教授	白鳥　義彦	副　査	准教授	平井　晶子
副　査	教授	油井　清光	副　査	准教授	佐々木　祐
副　査	教授	松田　毅			

	主査記載 氏名・印	白　鳥　　義　彦